



## 〈単語集 sözcük〉

トブラック toprak (名)

- (1) 土、土壤、大地、国土
- (2) 《クルアーン》人間は神によって初めに土(泥)から創られたとされる (18章「洞窟」37節、22章「巡礼」3節など)。
- (3) 《慣用表現》Bir avuç altının olacağına bir avuç toprağın olsun.

「一握りの金より一握りの土を得よ」(使われ消えるだけの金とは異なり、土は生産し与えるものとして価値が高いという教訓)

## いきりつき 第二号〈トブラック〉

執筆 | 今城尚彦・真殿琴子

編集/デザイン | 川野太郎

表紙写真 | 真殿琴子

発行 | Orcinus Orca Press

(responsetolight1852@gmail.com)

2022年4月1日 初版第1刷発行

燃えても燃えても」(Ben yürürüm yanm yanm) から始まる有名な詩において次のように詠っている。

Ben yürürüm hidden ile  
Dost sorarım diliden dile  
Gurbette hâlim kim bile  
Gel gör beni aşk n'eyledi

私は歩む、かの地からかの地へ。  
友を求め行く、口から口へ。  
異郷にて我が身を誰ぞ知る。  
来れ、見よ我を。愛は何をもたらさん。

〔翻案〕

※原文に関しては複数の説が存在する。

ここで言う異郷を現世そのものと捉えるのがユヌスの真意に沿った読み方である。どんなに友に恵まれていても孤独を感じてしまうのは、それが宿命のように心根に刻まれているからで、人間を真の友を求める旅へと駆り立てるものもまた孤独であると思う。ユヌスが歩んでいた場所も何もないところがほとんどだったのだろうと想像する。もっと無造作の自然が広がっていたはずで、その歩みの過酷さは想像以上だろう。それに比べたら私の探求は気楽でのんきだなあと考えた。行こうと思えばもうどこへでも行ける時代なのだ。何となくその過度な便利さに後ろめたさを感じながらも、やがてバスはコンヤに着いた。その晩に私は念願のルーミーの墓廟の前に立って棺の中で眠る人に心の中で挨拶を送った。「サラーム、私は日本から来ました」

## 異郷の土 | 今城尚彦

サリーヒおじさんが亡くなった。といっても私は彼を知らない。私が住んでいるホテルのオーナーのおじだそうだ。三月七日、アンカラから運ばれてきた遺体は、私が調査で滞在しているハジュベクタシュ町を一望できる「チレハーネ」と呼ばれる丘にある市営墓地に埋葬された。一五時頃、葬式に間に合うためオーナーは私を助手席に乗せて車を飛ばしたが、葬式にたどり着いた頃にはサリーヒおじさんの棺はほとんど土の下にあった。市役所の職員が土をかけ終わると、モスクの導師(イマーム)によって故人を送る祈りが捧げられ、最後に参列者はクルアーンの「開端章」を唱えた。

私にとって葬式はあまりにあっけなく終わった。葬儀が行われたチレハーネを後にするとき、サリーヒおじさんの娘にあたる女性が私にこう言った。「人生ってこういうものよ、まるでなーんにもしなかったみたいに土に行くんだから」サリーヒおじさんは、彼の顔すら見たことがない私にとっては本当に「なーんにもしなかったみたいに」、被されたばかりの土の下で眠っていた。

参列者が車で次々に墓地を後にするなか、女性の言葉を消化できなかった私は一人で歩いて帰ることにした。チレハーネから見える景色は本当に広い。カップドキアの谷の遠く向こう側には内陸アナトリア最大のエルジエス山が見える。チレハーネから続く坂はハジュベクタシュの町を越え、隣県のクルシエヒルとの県境である「燕山脈(Kılkangir Dağları)」と呼ばれる山々までなだらかに続いている。しかし長引く冬の寒さのなか、灰色の雲に覆われた景色を前に「なーんにもしなかったみたいに」という言葉を反芻していると、「自分もここで死んだらどうなる?」という思いが一瞬胸をよぎった。イスタンブルからバスで十二時間、アンカラからも四時間かかるこの田舎町に誰が来てくれるだろう? あまりにあっけなかった葬式の後、大

きすぎる景色を見てみると、ついそんなことを考えてしまった。

しかし同時に、この景色に愛着を持つようになった日のことを思い出した。私が初めてこの町を訪れたのも、ちょうど七年前のこの時期だった。二〇一五年三月四日、アンカラからネヴシエヒルで乗り継いだバスの車内からは、麦の苗が黒々とした土から芽吹いている景色が見えていた。その緑は固く編み込まれたキリムの模様みたいにきれいだったなあと感じる。その後ろには、クズルウルマク川(トルコに水源と河口がある川の中で最長の川)の水面がきらきらと輝いていた。



撮影：今城尚彦

まさにそのバスの中で私は、トルコで最も有名なテュルキュ(トルコ語やクルド語の民謡のこと)の担い手であるアーシユク・ヴェイセル(一八八四〜一九七三年)による「黒い土(Kara Toprak)」という歌を聴いていた。当時私がこの歌を聴いていたのはアーシユク・ヴェイセルくらいしか民謡の担い手を知らなかったからだが、景色に合う音楽を聴こうとしていたのは確かだ。彼はサズの弦を鳴らしてこう歌う。

Bitün kusurumu toprak gizliyor  
Merhem çalıp yararım düziyor  
Kolum açmış yollarımı gözliyor  
Benim sâdik yârim kara topraktır  
Her kim ki olursa bu sırta mazhar  
Dünyaya bırak ölmez bir eser  
Gün gelir Veysel'i bağrına basar  
Benim sâdik yârim kara topraktır

私のあらゆる過ちを 土は覆い隠してくれる  
薬をぬって傷を平たくしてくれる  
手を広げて私の歩む道を見守ってくれる  
私の頼れる友は黒い土

この神秘にたどり着いた人はいずれも世界に永遠の作品を残すだろう  
いつかこのヴェイセルのことも その胸に抱きしめることだろう  
私の頼れる友は黒い土

七歳で天然痘により視力を失い、スイヴァス県の山奥で農作業によって生計を立てていたヴェイセルにとって、土は生きる糧であった。農具で傷つければ傷つけるほど、土は彼に果実や花を与えてくれた。一生をともに過ごした土は、彼にとって唯一裏切らない存在であった。そして土から創られた人の子であるヴェイセルも、いずれは土とともに眠るのである。

亡くなった人に向けられる「土があなたを傷つけませんように」(toprak seni incinmesin)」という言葉がある。ヴェイセルが「頼れる友」とともに眠るように、サリーヒおじさんも土に優しく抱かれていることを願う。(つ)

Gurbet——グルベットという単語について考えている。異郷。故郷を離れて馴染みのない環境で生きること。ホームシック。

ここからはるか東の果てにあるとされる島国で生まれた人間も、トルコ語で言われるグルベットという感覚を知っている。私もトルコでは外国人であり、ここに数ヶ月住むために移民局へ行って滞在許可証を申請した。どこへ行っても「なに人ですか」と聞かれる。日本人です、と答えるたびに、私はここに住む人たちは違う民族、違う文化を持っていることを意識させられる。この、異郷の地で自己に対して感じる異質感。この感を以てこそまさに「グルベットなう」(Gurbeteyim) と言いたくなる。

## 誰もがグルベット——真殿琴子

ブルサでアブラ(トルコ語で「お姉さん」)の家に泊めてもらっている間、毎晩一緒に映画を観た。七〇年代のエーゲ海地方の村を舞台にした映画「断食明けのガゾズ」(Hırlık Gazoz)——ガゾズはトルコの炭酸飲料——を観た次の日、私は「おもひでぼろぼろ」をアブラとどうしても観たくなった。私の母親と同年代である彼女に八〇年代の日本を見せてみたくなったのもある。都会生まれの主人公タエ子は田舎に強く憧れを抱く。同級生の夏休みの帰省先を羨望するタエ子。そこで生まれて育ったわけでもないのに、里山の風景を自分のふるさとのように「懐かしい」と形容するタエ子。そんな彼女のことを映画を観るたびにあわれだと思ってしまうのだが、これも毎度ながらそのあわれみの目は最終的に自分自身に向けられる。私もトルコに対して似たような気持ちを抱いてしまっているからだ。トルコでは外国人であり続けるのにもか

かわらず、である。帰りたい、と強く願う場所は私にとってもトルコだ。だけど、そこでグルベットを生きている。やっぱり何となくあわれた。

コンヤに向かう七時間のバス移動の最中、私は延々と窓の外を眺め続けた。砂塵が舞っているかのような全体的にざらざらした風景がそこにはある。延々と広がる乾燥した地面、等間隔で植えられた細い木々、灰色の空。飽きることなく何時間もその風景を見送りながら、ここで置き去りにされたらどうなるんだろうと考えた。それはまるで関西圏と東京を結ぶ新幹線の中で感じるような在り方で胸の内からわいてきた間이었다。それからわたしは自然と自分の中に「孤独」のイメージと向き合わされた。内陸アナトリアの原風景のような場所を日本の東海地域にたとえるのは自分でもおかしいと思うが、それはなぜかありありと思い出される。人気がない淋しい景色の中に埋没する自分の姿とその存在としての頼りなさを思いながら、私はスーフイズム的な意味でのグルベットについて考えた。

スーフイーの言うグルベットはまさに現世における人間の状況のことで、現世そのものが人間にとって異郷だという。現世では人間は神のもとを離れて、誰もがグルベットを生きているというのだ。トルコではメヴラーナー(「我らの主人」を意味する)と呼ばれ親しまれる十三世紀のスーフイー思想家ルーミーはその「別離」の悲しみを箏笛の音色に喻えた。かつて根を張っていたところを惜しむ箏は笛となって悲しげな音を響かせる。まるでそれは人間の本質的な悲しみを示唆しているかのよう。

ルーミーとほぼ同時代を生きたスーフイー吟遊詩人であるユヌス・エムレもまた、「我は歩む、